

クレマンティーヌ・コンクエスト

ク・ドウ・グラス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

略して●●●。またはクレ●●●（略）。

スレイン法国を裏切り、秘密結社を見限り——孤高の戦士の逃亡劇の先に待っているものは——

最終話『犯人はシズ』二〇三五年末公開予定。

たくさんのオーバーロード二次作品の中で殺人鬼なのに皆に愛される稀有なキャラクター。

洗礼名を除けばクレマンティーン・クインティア。名前自体は特段珍名というわけではない。

目次

芸達者にも程があんぞっ！	1
不意打ちにも程があんぞっ！	6
期待するにも程があんぞっ！	12

芸達者にも程があんぞつ！

国を裏切り逃亡生活を続ける女襲撃者『クレマンティーヌ』は様々な不運に見舞われて命を落とす。

——普通ならばそれで終わりだ。だが、蘇生魔法が存在する世界において続きが発生し、彼女は何処とも知れぬ森の中で息を吹き返す。条件によって選ばれたのは秘密のアジト——があつた場所。ただし、今は建物などが撤去され、見えるのは深い森の木々のみ。

「……クソっ。またか……」

彼女が命を落とすのは一度ではない。

数えるのも虚しくなるくらいだ。その度に鍛錬を積み、生存をかけた戦いが始まる。それを繰り返して今まで過ごしてきた。

己の自由意志の為に——

しかし、世界はとても残酷で彼女に幸せを与えはしなかった。

だからといって諦める事は出来ない。

生きている限り足掻き続ける。それがクレマンティーヌの信条だからだ。

クレマンティーヌ新生編

蘇生直後は大抵頭がパーになっているので『まあいいか。難しい事はわからねーし』と簡単に考えてしまう。しかもそれを何度も繰り返しては同じ結果に陥っているような——

思考力が戻る頃には何がしか、手遅れになっている場合がある。だが今回は——今回こそはと期待する。

(……なくんか、色んな世界で活躍してたような……。小さくなったり大きくなったり……。変身したり歌ったり躍ったり殴ったり淫らになつたり……)

過去を振り返ろうとすると激しい頭痛が襲う。それを思い出してはいけないと言わんばかりに。

ここまで多岐に渡る複雑怪奇な記憶の混濁は例に無いのでは、と思わせるほどだ。

極最近では見知らぬメイドと酒の飲み比べをしたり、得体の知れない強者の存在にビビツたり、精神崩壊レベルの衝撃を味わったりしたような気がした。

あと、何故か『お花が綺麗』という言葉が印象に残っている。

(はあ？ マジで訳が分からねー。顔でも洗いたいところ、だ、が……。ここはそもそもどこら辺だー？ 追っ手の気配は……。無さそうだけど)

蘇生直後はいつも混乱する頭の整理から。

理由は分からないけれど自分は何度か死んでいる事だけは覚えてる。

それ以外は思い出した方がいいのか迷うところだ。もちろん、嫌な記憶は忘れてしまいたいけれど。

(……蘇生による弱体化で『武技』<sup>ぶぎ</sup>は使えないかも……。一体私は何度死んだのだろうか……。とても憂鬱……。こういう時は酒でも飲みたいところだけど……。どうしてかそれはやめた方がいいという気持ち湧く。……。何故だ？)

暗い森の中を歩きながら思考力を付ける為にブツブツと少し漏れ出る小言を無視して思考する。

現在位置は分からない。けれどもどこかしら抜け出して街にでも行かなければ情報は手に入らない。

追っ手の事が浮かんだが実際のところ——誰に追われているのか思い出せない。だが、誰かが自分を追っている事だけは分かっている。

迎撃してはいけないところから強い輩なのは間違いない。

記憶を失う前の自分は一体どんな悪事をどれだけ犯してきたのか。それも今は全くといっていいほどに思い出せなくなっていた。

覚えている事は自分の名前と漠然とした処世術程度。

何もかも思い出せないのであれば森の中で死に続けるか、灰になるだけだ。

(……時間経過と共に少しずつ状況が理解出来るところから、ずっと記憶喪失ってわけじゃないみたい。という事は、私は結構……。冷

静に思考できる人間ってこと?)

それが良い事なのか分からないけれど、とにかく光りを求めて進み続けるだけだ。

今の時間帯が夕方なら何処かで野宿するしかない。

空は木の枝で塞がっている。光りは僅かばかりある程度。生物の気配は無い。

手持ちは皮製の軽装鎧と刺突武器が二本。携帯食料は無し。

空腹は多少は感じる程度――

(何度も死んでいるなら途中で餓死したのか？ それとも森をちゃんと抜けた後で某かの事件<sup>なにがし</sup>にでも巻き込まれた?)

仮に追っ手に出くわせばこんな森の中での復活はしない。

きちんと本国で拘束される筈だ。そうでなければ――

復活する意味が分からない。

少なくとも誰かの意思が働いて復活するのが蘇生魔法だ。自動的に甦るわけではない。

では、誰が蘇生させてくれるのか。それは未だに思い出せない。

(何度も蘇生させてくれる太っ腹な知り合いに覚えが無いんだが……。ありがたいのか、迷惑なのか判断が付かない)

溜息をつきつつ前に進み続けるクレマンティーヌ。

体調の具合から顔はひどくやつれて全体的に疲労感いっぱいではないかと予想する。

鏡などで自分の顔を見るのが今はとても怖い。

クレマンティーヌ新生編

夜もふけて視界が効かなくなった所で野宿する事にした。

幸い近くに獣の居る気配は無く、音はとても静かだった。

事前に集めた小枝を重ねて簡易的なテントを作り上げる。

(……野垂れ死にはごめんだが……。疲れが一向に取れないのはなんとかしたいところ)

何度か溜息をつきつつ睡魔に身を任せる。

酷く疲れていたせいであっさり眠りに落ち、肌寒さを感じて起きる頃には辺りが薄っすらと明るくなっていた。

真夜中の活動は生物であれ、人間であれ無理に動くのは危険だ。まして夜目に対する適切な対策を持っていなければ尚更だ。

感想もそこに痕跡を消しつつ身なりを確認する。

遺失物は無いが、身体の不調はあまり改善されたとは言えない。だが、記憶力はある程度戻ってきたのは分かった。

(……エ・ランテルの南方よりの森か……。とうか、ここに何度も来ている様な気がする。とても見覚えがある風景だし……)

そして、同じ場所で復活したという事は良くないことがまた起きる確率が高い。

このまま前に進むべきか、それとも反対方向に進むべきか。

まずはつきりさせなければならぬのは自分の進むべき道だ。

何度も復活している事を棚上げにして、思いつく事はバハルス帝国への亡命だ。そしてそれは何度も失敗していると見て間違いない。

国境付近に屈強な存在が居るのか、それとも追っ手に捕まったからか。だが、仮に追っ手ならばあつさりど殺されるよりは拘束が第一目標となる。であればなんだ、とクレマンティーヌは悩む。

得体の知れないモンスターと何度も出くわす事がありえるのか。それとも全く別の可能性か――

(単なる殺しなら一度目で達成している筈だ。何度も、というところが疑問だが……)

とはいえ、いつまでも森の中で自問自答していても何の解決にも繋がらないのは事実だ。だが、それでも気になった問題は解決されるべきだ、とも思う。

森の中が一番安全ならば出ない方がいい。しかし、それではいつまでも森から出られないことを意味している。

それを繰り返し返せば自分は今度こそ復活せずに灰となる可能性が高くなる。もう充分に弱体化しているはずなので。

「……………」

とにかく森の出入り口まで行ってから考えようとクレマンティーヌは結論を出した。

なにはともあれ、原因を一つずつ確認してからでも遅くはない。既

に——きつと——手遅れだ。

ならば無理に抗うより受け入れた方が気分的にも楽ではないかと。最悪の結果しか無いのであれば今以上に悪い結果はきつと無い。ただただまた死ぬだけだ。

それが避けられないなら諦める事も一つの結論だ。だが——もし可能性があるならば——

足掻き続けるのがクレマンティーヌ様らしくていいじゃないかと、と苦笑を浮かべる彼女の口は酷く歪んでいた。

それはもう耳まで裂けているのではないかと——



不意打ちにも程があんぞつ！

森の外までモンスターに出くわさず、また厄介な強敵の姿も無く――

多少の空腹を覚えつつ歩き続けた。

何度蘇生されたのか分からないが、何度も森の中で死にたくはないし、外でも同様――

途中身体感覚を取り戻すために鍛錬おこなを行いながら、目的地である森の外にたどり着いたのは二日後。

思いのほか体力が落ちていた。野宿しても休めた気がしない。

(……こんな調子で帝国まで行けるとは思えない。かといって他の都市に潜伏するには遠すぎる)

どの道、距離的に遠いのはどこも一緒。近隣の村でもこの際我慢することにする。

もし、復活地点が同じであれば王国領に近いはず。追っ手に捕まっていないところから奴スレインらの領域からはかなり外れていると予想する。

(……だが、それでも何度か殺されている。一体誰に?)

死亡する前の記憶が思い出せないのは痛い。

復活拠点に誰も居ないのは確かだが――もしかして行く手に待ち構えられているのか、と危惧する。

しかし――

そうした思索を重ねたところで結果が同じであればどこに逃げても同じである。

クレマンティーヌは深くため息をつく。そして、森の外の空を見上げた。

綺麗な空だと思った。何度も死んでいるからなのか――気持ちはずっとも穏やかだった。

(……ああ、この先に進めば私はまた死ぬのか……。……次こそは灰に還りそうだが……。だけど……。まだ生きていたい……。お酒を

たくさん飲みたいな……。美味しいものもたくさん食べたい)

食欲があるならば希望はまだ潰<sup>つぶ</sup>えていない。その筈だ。しかし、それは森の中に居る間だけの気持ちだ。一步先は地獄。

多くの修羅場には慣れたつもりではある。だが、現実はとても恐ろしい。

(……怖いよー。マジで怖い。多くを手にかけてきたツケが一気に来たみてーだ)

恐怖心は強者との戦いには必須。恐れるものがあるから無茶をしなくて済む。

引き際を見極められなければ長生きできない事をクレマンティー又はよく知っている。そして、よく理解していた。なのに今回ばかりは自分の判断が信用できない。

出来ないというよりは未知の恐怖が自分を捉えていて逃げられない状態になっている、気がする。

クレマンティー又新生編

森の外に敵と思われる姿は確認できない。魔法的な結界の類<sup>たぐい</sup>も確認できない。それ以外の罠の存在も――

出てすぐに殺されるわけではなく、ある地点で待ち構えていると思われる。根拠は無かったけれど長年の勘に今は頼る以外の術<sup>すべ</sup>を持ち合わせていない。

おそろおそろ足を日の光りに当てる。もし、自分がアンデッドであれば浄化作用が起きる。無自覚に変質させられている可能性もあるので、念のための行動だ。

(……弱体化だけか？ それとも別の要因か？)

運命に翻弄される生き方を選んだ自分が悪いのだが、今はとても素直な自分を行け入れている。もう悪いことはしたくないほどに。

自分が信奉する六大神に祈りを捧げる。今回は六人全員だ。

久しく頼らなかつた無神論者ではあるが元々は敬虔な信者であつたクレマンティーヌ。

様々な要因を経て、今の荒<sup>すさ</sup>んだ生き方を選んでしまった。

(そういえば……。私の装備品は何処へ?)

人間——死んだ後蘇生魔法による復活の際、生前身に着けた装備品も一緒になることがある。装備から外していた場合は諦めるしかない。

今のクレマンティーンは幾分か軽装であった。完全な裸でなかったのが運が良かった。

季節柄葉っぱだけで森の中を移動することになるのは——女性としては——抵抗があった。

最低限の装備品だけで満足するとして、随分と軽くなった事は残念に思う。

(ガントレットは無し。内着は申し訳程度……。軽装鎧も胸を隠す下着と変わらない。下半身も同様、と……。で、武器はステイレットが一本だけ……。奪われたか、どこかに落としたか)

改めて自身の身体を確かめる。

街に入っても怪しまれない程度の装備に安心と不安が半分半分といったところ。

飲食するための資金稼ぎが最大の問題だと判断する。

(私の後ろはもう無い。前に進んで終わりなら……。それもまた良し、か……)

軽く息をつく女暗殺者。クレマンティーン今は弱体化によつてただの戦士になつているかもしれない。

武器を握れるだけの存在だとしても生きているからには前に行かなければならない。

もう引き返す道は無いのだから。

バシユ。

耳に届いた音は聞き慣れないものであった。

いざ森の外へ身を乗り出そうとした瞬間に聞こえた。疑問を覚える暇もなく同じような音が聞こえた。

「……？」

閃光。一瞬だったが何か光った。おそらく音の元凶だ。であればそれは何に向けられたものであるのか——

呆けた状態のクレマンティーンは視界が揺らぐのを感じた。より

正確には態勢が傾き始めた。自分の意志とは関係なく。

ふと下を見れば繰り出す筈の右足が無い。太腿付近が歪いびつになつて  
いる以外――

「……ひっ」

短く悲鳴をあげつつ側にある木に手を突こうとした。しかし、感覚  
が普段と違うことに気づく。

肩口から先が麻痺したように――。否、それは麻痺ではなかった。  
左腕が無い。

態勢を整える事が出来ずに無様に木にぶつかり、地面に崩れ落ち  
る。そして、目の前にはまだ僅わずかに動いている手足が転がっていた。

何者かの攻撃であるのは理解した。それは普通の樹木に擬態した  
植物モンスターとは違ふと予想。

自分の知識にある植物モンスターにここまでの殺傷能力を持つ者  
を知らないのだが――

それにしても意識外からの攻撃は予想していなかった。いや、これ  
こそが自分の死因ではないかと気が付いてくる。

「……ぐうう……」

咄嗟の事とは言え大声をあげなかったのは拷問などによる痛みへ  
の耐性があったからか。しかし、それでもやはり痛い。傷口が熱く  
なってきた。

出血の度合いは多くないのは熱線により焼き潰されていると予想。

小さな音を発し、人体を吹き飛ばす高度な攻撃方法の記憶は無い  
が、敵が居る事だけは理解した。

やはり、自分は森の中で何度も殺されている。おそらく手口も同じ  
はずだと。

――であればもう、足掻くことは無意味ではないのか。そう思つて  
しまう自分を自覚する。

生と死を繰り返す。普通ならば蘇る事に喜びを感じる。けれども  
即座にまた死を賜たまわると話しが変わる。

普段以上に重い身体そのものが今はとても邪魔くさく思えた。

クレマンティーヌ新生編

声を出そうとしても無意味である。助けを呼ぶことも出来ない。けれども——助かりたい気持ちがある。

生きていたい。もはや後には何も無い。

クレマンティーヌは残った腕一本で地面を這いずる。どこへ行くかというのか、と自分に尋ねてみても答えは出ない。それはそうだ。自分が一番知りたいことだから。

(……今度は蜘蛛に生まれ変わるのかな……。一人で暗い世界を這いまわる……。けれども助けは無し……)

痛みで余計な風景を幻視し始めた。

朦朧としているのは何となく分かる。身体も重い。

なんとなく——

もうすぐ死ぬ。

いくら出血量が少ないと言っても血の匂いを嗅ぎつけた獣に襲われればひとたまりもない。

もう少して森から出られると思っていたのに。

その希望こそが罠だった。だが、それでも——進まなければならなかった。

惨めな薄暗い世界はもう嫌だ。

「……クソ。クソっ、クソクソ。……こんなところで」

弱々しく呟くクレマンティーヌ。

後方に置いてきた自分の手足にはもう未練すら感じない。今はただ前に進むだけ。

生きるためなら自分の肉体すら犠牲にする。ただ、生存したい本能だけが彼女の原動力であった。

その彼女に止めを刺すが如く、足音が聞こえてくる。死角から静かに。

迎撃する余力はない。思いのほか弱体化していたせいだ。

(せめて顔くらいは……見ておかないと)

大きなケガのせいで反撃したとしても助かる確率はほぼ無い。確実な死しか感じない。

それでも自分を攻撃してきた者の存在だけは見ておかなければ。

腐っても漆黒聖典の第九席次を務めた戦士だ。敵に対する敬意は僅かでも残っている。

近づく足音に対し、攻撃の手は止まっていた。そして——  
クレマンティーヌは何か音の方向に顔を向ける。

そこには——無があつた。

喜怒哀楽のどれでもない、けれどもあえて限定するのであれば僅かな驚き。それと悲哀か。

間違つた獲物を仕留めてしまった失策を犯した顔。

腰にかかるほど長い赤ストロベリーブロード金の髪の毛の人物は確かに、そんな顔をしていた。

期待するにも程があんぞつ！

襲撃者の顔は人間というよりは作り物めいたものに思えた。それはあくまで直感的なものではあったが――

喜怒哀楽が抜け落ちたように見えたのはおそらく幻だ。それを額面通りに受け取れる余裕は無かったけれど金髪赤目の女戦士クレマンティーヌは確かに見たのだ。

今までの人生において見た事の無い武器を携えて戸惑う襲撃者を。

(……こいつ。どこかで……。まさか私を何度も殺しているのはこいつか?)

それが真実であったとしても地に伏せるクレマンティーヌに抗うすべはない。ただ殺されるだけだ。

おそらく交渉事も失敗している。何度も、というところが引つかかる。

いくら短期的な部分が欠落しているとはいえ何度も同じ愚は犯さない。ゆえに結論は出た。

間違いなく腰まで長い赤ストロベリーブロンド金の髪を持つ人物が敵である。

「……………」

抵抗は無意味だ。それを悟ったクレマンティーヌに出来る事は死を受け入れる事とみっともなく足掻く事だ。それとて既に失敗している筈だ。

であれば――

(間違った獲物というわけではないはずだ。……現状を打破するだけの方法も無い)

(……もう武技が使えない? ……兆候も確認できなかつた。……実験は終了)

ほんの僅かな逡巡を抱くも襲撃者たる『シズ・デルタ』は武器を収めた。

打ち抜いた事で地面に転がったクレマンティーヌの手足の傷跡を確認する。熱線により傷口は焼き潰されており過剰な出血は認めら

れない。——本体の方も同様だった。

これにより彼女が出血死する事は防げた。それにシズは内心で安堵する。

(……予定数の死を超える処だった。次のステージに移行する)

迷彩柄のメイド服を身にまとう暗殺者然としたシズは蹲ったまま動かないクレマンティーヌの身体を仰向けにする。抵抗しなかったのが少し気になった。

少し前までは激しく抵抗した。その時は顔を吹き飛ばしたが——

今回は学習したのか手間がかからない。

「……質問」

「……喋るのかよ」

「……会話してはいけないとは言われていない。……どうして武技を使わなかったの？」

「……ああ？ ……ちっ。弱体化した今の状態じゃあ無理だ。それくらい分からないわけじゃない」

舌打ちしつつも強者に対し、クレマンティーヌは包み隠さずに答えた。これは何度も死んでいると予想しての結論である。

抵抗する事にもはや意味は無い。そう思ってしまったから。

仮に武技が使えるとしてもシズの攻撃を防げたのか、と言われれば否だ。全く感知できなかった。それは死ぬ前でも同様だったのだと

「……人間は窮地に立たされると物凄い力を発揮すると聞いた」

「……むう。それは……、出来る時と出来ない時がある。……私は出来なかった。それだけだ」

(……嘘は無さそう。……聞く前に殺さなくてよかった。……思わず、ということが私にはあるようだから)

聞くべきことを聞いたので処分する、という命令もまた受けていない。

窮地による起死回生の確認はここで終了である、とシズは判断する。

クレマンティーヌ新生編



手足を打ち抜かれたクレマンティーンを近くに作った小屋へと運ぶ事にする。ただ、その際の移動手段について思考する。

首根っこ捕まえるか、抱き上げるか。それとも背負うのが正しいのか、と。

生物をそのまま『異空間の倉庫』<sup>インベントリ</sup>に仕舞う事は仕様によって出来ない。だから今までは死体に加工してきた。その考えが惰性となり、何度も殺害する事になっていた。

今回、殺害を敢行してしまうと蘇生できずに灰になるところだった。

(……殺し過ぎるとアインズ様に叱られる。……生き物は大切にせよ、と言われたばかりなのに)

最近、大切にしている生物が増えてきたので手元に置く許可をもらう時、先の条件を提示された。

シズが所属する組織では部外者に対する規制が厳しい。誰もかれも招くことが出来ない。

一先ずクレマンティーンを電<sup>スタン・ショック</sup>撃によって気絶させて、担ぎ上げて運ぶことにする。

考え事が長引くと貧血でそのまま死んでしまうかもしれないし、自害の可能性も否定できない。

それから小屋に運び込んだ後、彼女が目覚める前に欠損した手足を再生させる。それにはシズだけでは不可能なので目上の存在たる『メイド長』<sup>ペストニーヤ</sup>に<sup>ぶ</sup>足労願った。

最近、人間の丸かじりが出来なくて不満を漏らしていたが先ほど撃ち抜いた手足を提示すると大層喜んでくれた。早めに保存しないとすぐに腐るのが生物の欠点だ。それと治癒魔法を本体にかけると離れた部位が光りの粒子となって消失してしまう。

ペストニーヤによって復活を果たしたクレマンティーン。しかし、それでも失った力まで戻ったわけではない。

(……後は食事療法とレベル上げ。……後者はアインズ様やデミウルゴス様にお伺いを立てないと……)

必要事項を忘れないようにメモした後、安静にしているクレマン

ティーヌの様子を窺う。

伝え聞いた情報が確かならば彼女を飼い殺しにする方が色々と利用しやすい、という事だった。だが、そういう方法に不慣れであるシズにとっては単独での解決方法が浮かばない。

戦闘には自信があるのに、と自分の欠点に気づいて意気消沈する。ただ、見た目には何かが変わったようには見えないけれど——シズの中ではかなり落胆があった。

クレマンティーヌ新生編

復活を果たしたクレマンティーヌに色々と条件を付けて逃げ出さないようにするの一日かけ、次に彼女は人間種なので飲料と食事が必須である。これについてはお詫びもかねて提供する旨を伝えた。

シズにとってクレマンティーヌは絶対に殺さなければならぬ敵ではない。単に武技の情報を持っていそうな人間だったただけだ。——念のために至高の御方たるアインズ・ウール・ゴウンに尋ねると知らない人間だと言われた。あと、生き物を大切にしないかと怒られてしまった。蘇生費用もタダではないのだから、と。

ユグドラシル金貨換算で彼女にかかった必要は約七〇〇万枚。確かに殺し過ぎた。

攻撃に使った弾丸も貴重なもの。五〇発ほど浪費したことを思い出す。——つい、興が乗って——

(……遠距離攻撃ばかりしたから……。……接近戦だと身元がバレるおそれが……。、という言い訳ばかりしてこの様……)

しばし反省の時間を取り、それから体調が回復したクレマンティーヌとの対話に臨む。

聞きたいとは武技のことについて。問題は情報を得た後の措置だ。口封じすべきか、それとも見逃すか。

質問するのに何度も殺しているので多少——相手に悪いことをしたと自覚している。

元より彼女を殺す命令は受けていない。思いのほか弱くてあっさり死なれてしまったただけだ。殺すつもりはなかった。反省はしている。と、シズは脳内で反省の弁たれた。だが、それをクレマン

ティーヌに伝えていない。その必要性を感じなかったからだ。

人間に反省の弁を伝えなければならぬ理由が浮かばない。反省しているのは己の所業についてのみ。相手への配慮は考慮していない。

(……私の仕事の不始末が招いた結果……。……反省は必要。……次にこの人間への対応)

生き物を大切にしない、と言われたので今度はちゃんと生かして逃がさないといけない。多額の資金を費やしてしまったのだから。

可愛いと思えば大きさは関係なくシズは対象を愛でる。クレマンティーヌは弱い人間だが可愛いという範疇にあるのかは疑問であった。だが、即座の抹殺対象ではないので少なくとも考える猶予があるだけ。

シズに無表情で見つめられるクレマンティーヌ側も生き残るすべを懸命に考えた。だが、蘇生直後は頭の働きの鈍く、うまく考えがまとまらない。

逃げ出そうにも身体が重し、口も上手く回らない気がする。ちゃんと喋れているのか自信も無い。

(……何度も殺すのはいいとして……。よくはないけど。生き返らせる理由はなんだ？ 情報が欲しいにしては……。私を殺し過ぎてる気がする)

単に生き物を殺しては蘇生させる狂人か、とも思わないでもない。しかし、そんなことをする裕福な貴族に心当たりはない。そもそも蘇生手段を持つているだけでも尋常ではない。

まず最初に浮かんだのは命乞いだ。それしかないと言ってもいいくらい絶望的な状況になっている。ここは無理矢理にでも足掻くべきだ、と頭では思っているが何度も失敗している気もした。

起死回生を狙おうにも相手方はそれを見据えて殺しに来ている。であれば大人しくするしかない。